様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　８ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ２０９８３

研究課題名（和文）「和様」をめぐる実証的研究―模倣と変容の位相―

研究課題名（英文）An Empirical Study on "Japanization" -Phases of Imitation and Transformation-

研究代表者
京都　絵美（Miyako, Emi）

東京藝術大学・学内共同利用施設等・講師

研究者番号：４０６３３４４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は主に様式論や画史、画論等によって検討されてきた「和様化」という言説について、写し描く行為に主眼を置きつつ、平安、鎌倉時代の仏教絵画と宋代著色絵画との比較を中心に、実技的な側面からその具体相を考察したものである。本研究では材料や表現技法の分析、また実技による検証を通して、宋代絵画に見られる、色料と絹の透明性を効果的に生かす彩色法や、用絹法など技術的な部分での日本絵画との差異を明らかにし、それぞれの色彩や装飾、線描に対する認識や絵画観について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで絵画史において和様化を論じられる際には、主に能動的な「取捨選択」に意識が持たれてきた。本研究では作画の場における学びと技の伝達という側面を重視し、日本の仏教絵画と宋代絵画にみられる技術的差異に注目した。実技の教えは、肝心の部分は口承伝達や言外の感覚の共有によることが多いため、工房、師弟関係のような技能を相承される「場」がある場合と、入手した請来絵画や粉本といった「手本」に学び作画する場合とでは理解に差が生じる。本研究は絵画制作における実技の継承という新たな視角を提示し、技法材料の分析から、それぞれの技法の特質と絵画観を捉えたものである。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the comparison between Buddhist paintings of the Heian and Kamakura periods and colored paintings of the Song dynasty, and considers the nature of "Japanization" from a practical perspective. The significance of this study is that it focuses on the professional consideration of techniques and materials, and the transmission of techniques in painting production. The discussion of "Japanization" in art history has mainly focused on the conscious selection of Chinese art. However, in many cases, oral transmission and movement understanding are most important in practical skills. In my research, I clarified the technical differences between Japanese and Chinese painting and discussed their views on painting from this perspective.

研究分野：絵画技法・材料

キーワード：和様化　絵画　技法材料　模写　絹本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の日本絵画史研究では異文化受容や影響論から転換し、東アジア絵画としてより広汎にその展開を捉え、これまでの枠組みや言説を問い直そうとする研究が多く見られる傾向にある。「和様化」についてはこれまで多くの検討がなされてきたが、それらは主に画史、画論等や様式論に基づいたものであり、実技面の具体的な検証は乏しかった。

２．研究の目的

本研究は、和様化、日本化の特性としてもっとも頻繁に用いられる装飾性と平面性という言説について、実技的な検証を意図したものである。本研究の試みは、完成した作品の色彩や形ではなく、制作の場と制作過程に着目し、画工、絵仏師の視点や意識に迫ろうとするところにある。古代中世の絵画、中でも仏教絵画は手本を忠実に写すことを前提としており、写すことと描くことはほとんど同義的なものだったと考えられる。ただそれは工房、師弟関係のような技能を相承される「場」がある場合と、入手した「手本」に学び作画する場合とが想定される。実技の教えは、肝心の部分は口承伝達や言外の感覚の共有によることが多い。学びをもたらす場での技の継承と、請来絵画を模することでは、おのずと絵画理解において差が生じるはずである。本研究ではこの言外の感覚を、日本の仏教絵画と請来画にみられる技術的差異から捉え、それぞれの絵画観に迫ることを目指した。

３．研究の方法

技法・材料の研究には作品の熟覧に加え、マクロレンズ撮影、マイクロスコープ撮影、高精細デジタルスキャン（通常光および赤外線撮影）による調査を行なった。肉眼では観察し難い顔料の粒子や画絹の情報を組み合わせることによって、裏彩色や塗り重ね、制作工程を考察した。また、原本と模本の関係になる作品群については画像処理で図像を重ね、どのように写したかについても検討した。より実技的な検証が必要と思われた部分については、可能な限り原本に近い支持体と色料を用いてサンプル制作を行なった。

４．研究成果

(1)調査について

キジル石窟、クムトラ石窟、敦煌西千仏洞、敦煌莫高窟、敦煌楡林窟において多数の石窟壁画を集中的に熟覧、各年代の多岐にわたる壁画彩色、特に第３窟千手千眼観音像の完成された線描に至る絵画観と壁画、絹本、紙本各々の制作技法について考察した。
絹本絵画では永保寺所蔵千手観音像の熟覧調査、西大寺所蔵「十二天像」のうち６幅、仁和寺所蔵の国宝孔雀明王像とその模写である仁和寺自性院源證筆孔雀明王像の熟覧調査および撮影、東京国立博物館所蔵「紅白芙蓉図」二幅、「猿図」の熟覧、大阪市立美術館所蔵伝王維「伏生授経図」、胡舜臣・蔡京「送郝玄明使秦図」、「名賢宝絵冊」、伝易元吉「聚猿図」のマイクロスコープ撮影（東京文化財研究所との合同調査）を行い、そのほか台湾故宮博物院「國寶的形成–書画精華特展」「国宝再現特展」等、国内外の作品展示に参観して大きな知見を得た。また、美術史研究者から提供を受けた平安時代の仏教絵画のポジフィルムをデジタルアーカイブ化して参考とした。

(2)材料・技法研究について

調査で得られた情報や画論等の文献資料について、実技によって検討する必要があると思われたものについては実験制作を行った。現在伝統的とされる材料でも実際には近代以降質的に変化したものが少なくないため、材料研究も並行しておこなった。接着剤については日本学術振興会特別研究員宇高健太郎氏の協力を得て、牛生皮、鹿角を原料とした膠を製作し、色料では特に藍についてワークショップを開催した。基底材については勝山織物絹織研究所と苅周株式会社に取材し、近代以前の画絹と現代画絹との質の差を再認識するとともに、特別に再現製作された古代絹を用いて、滲み止めの効果を検証すべく中国の画論を参考に画絹の素地加工および描画実験を行なったほか、絹継とその彩色への影響を検討した。日本絵画では同系色、補色を効果的に配置することによって鑑賞者の視線を重要なモチーフに引きつけるとともに「空間」を演出する意図的な色彩構成が見出されるが、宋代絵画では、線描を重視して色料と絹の透明性を効果的に生かす彩色法や、用絹法などといった技術的な部分で日本の絵画と違いが見られ、研究目的に掲げた技の伝達に関わる問題を確認することができた。

(3)研究成果の公表

上記の内容についてはこれまでの研究会、ワークショップ等で一部発表しており、次年度以降

の活字化を目指している。研究期間中、古典絵画の復元模写に関する研究に研究分担者として参画していたことで、技法材料の研究蓄積を相互効果的に活用することができた。研究会によって材料・技法に関心のある研究者、学生らとの交流の機会も増え、今後も美術史や保存科学等、関連分野の専門家と各々の知識を共有する必要性を感じている。また、本研究を起点として、近代以前の画絹の糸質、繰糸法、劣化のメカニズム等について不明な点が非常に多く、著色技法の変遷と画絹の品質および素地加工との相関関係を通史的に把握し、実技を通して解明することが新たな課題となったため、後継となる「絹本著色絵画の技法史的展開に関する研究」へと繋がった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 京都絵美	４．巻 50
２．論文標題 幸区塚越東明寺「絹本著色地蔵菩薩像」について	５．発行年 2016年
３．雑誌名 川崎市文化財調査集録	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 京都絵美
２．発表標題 絹本著色技法の史的展開について　仁和寺所蔵孔雀明王像をめぐる一考察
３．学会等名 東京文化財研究所文化財情報資料部研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 京都絵美
２．発表標題 絹本仏画の技法と表現
３．学会等名 ワークショップ＜復元研究と技法材料＞
４．発表年 2017年

１．発表者名 京都絵美
２．発表標題 藍に関する諸問題 －絵画史の視点から－
３．学会等名 ワークショップ「絵画材料としての『藍』について」
４．発表年 2017年

１．発表者名 京都絵美
２．発表標題 復元思想と絵画の「写し」
３．学会等名 科研研究会〈絵画の再生－改装・復元・復元根拠〉
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考